新板

必入

咲分五人囊

三

へ遠13
1329
3

女冊

大坂高麗橋
又こう
本店

大坂高麗橋
かくらのうち
福屋今蔵

咲分五人媛

第一　強い弟の母と接拗い親孝で風流者

目録

三之巻

京都帝国大学
附属図書館

京都帝国大学
附属図書館

京都帝国大学
附属図書館

蒸気と自慢の巣鷲い男に惚る邪見者

親孝い切戸妙文珠勾玉も呑る動産の男

人目を忍ぶ寝のござ上衾の海深い遊

第二 好ね客は床ぐ古市の都女が苦境
縁そ邪えん男よ成おの観音人年寄り
平は名を汲でらんの井戸車四方の片破
名はおそては金も接木の菓实は忘乃口明

第三 悲は只ね睦まじの煽め心に燃る妻木が幽灵
死でも主のゐに世話を焼鉄ぎ身に招る嗔女
立張名の紐を解守銭無ひよに入家は眞種
是身の山は平瀬川の儀の為てゆく野王丸

一

遠いは山升の間と接婚は親と遠くて風流君
是は直言いふかじゃんも逆ま身を幸と云ふ東は都る江戸
との接ひなるひ。親と共て慈悲を飾る子をが願ひは家
おの紐の薬ふれど。家は明りはゆづに夕くんざる邪な親で婚家来
か今云ときらず。よく悪氣まいるてよらゞしてさとれば。
まれがありる様子よいよかり。侍害を狂つと侍るの形を
すりそ君のがめが面縛を悪つて。向後家内の不行ゐか色ぜん
その婚と断て下人共が縁金を名へ佳すに情まやてゆかにして
それん焼鉄もきみよ焼さ。コレ三郎表へ行てその忍めを引
どろて来られよし。ねふさおつつと中ぐらの煽ちらんごんるさくと
さゝでく。旦人の婚は身の毛をよそ面々が身にあてらるゝ思ひを

あすこの野郎は汗をたらし、顔と顔とを見合せて吐息をつき、そのうちおさんハ
空地よけれ姿つきにてすまふ夜ハ亡者の丹波の屋形の閻魔
ざ面の玉の御姿、是ハまた亡者、今より来の列にまかりける者
目ざしもちや、虚空の延しおへバ、志つらぬ事で、鬼にハ宮ハ母なと
かくまで亡者の内宅、ござれバ亡者のありがたさを知らで来るをハ、いつもは
行付かなくいきく志つら顔つきハ鬼女がくらうもあらぬぞ。女房が行付。
縁よれいば二角ゆへバ、何ゆへも女がまた行付けれ。今宵の月後に嬉しき
らぬ世に、ば住み亡者の諸共で出て行バ、おさんハ志のぶを知らぬに、ゆ
くへしまい出ると、亡者おつぎ様をもそのゝ、コレおさん、此度亡者の事ど一
列の願ひはせんつかるてさんゆへかゝぬとどゝてしらとちぶかぞあやら身と
ともくに恵ひもいたして鉄の手に持する橋よ焼鉄をあそさせぬと、つ
れにゆるして心入ハ親の入れをとちぎく、やすき縁とらず、もう冗談なこころを
ひるがへし、後一面の亡者とひくつよあそで、宝の者のうちに我がそでたすくる理と
せめていふいぞハけるものハ、此世を六七十人のかゝりひとをしまひにあのすがりけつるまで
ニにかで家来たちに黒毛とよすまいやひかせぞで、つかうるもなまめる人の
つかひをでいぶ、大家がすてまねく袖ふりかなて表の小屋へ行よくみへけり。
そのまゝ志のぶとりそて来り。夫婦がおよつきさすめるハ、ぶらりじゃうむごい
ゆる婦てあお、獄卒が罪人とうけ来るよりおそろし。夫婦ハ志のあさまと
ひくきろみて、今ぞ刻をもげなくまにしてはすさ諦くとう皮ぞでおとのけたお
事つかる夫婦の夫の、大婿のその焼き子おつとらびくにあぢさとまがつき
いくせハお鮮もの顔よ見をうつせ。アゝ心やおつやそ後へ分で、いさ
つまゝの人の嫁家内の者、二月たみぐすりを乞に、業しきおぬとあげあり
といふすかハ他、山林たへ指たと積ありけ、貌よ個女書たもし
かゝる悪鬼、情といふ者ハ、夫婦がおもなりいつける焼を子ハ夫婦が縁なれ

あんぴをのくるぶしのうえすぐきはるかに編みて紅絹つい
ぶはと白絹三尺ほかさるいぱ鳥のようなるいぱ場をのくるぶあてさ
する焼鉄ばかりなる男女共に白粉とわり髪にきものゆとはおうしろと
足ゑあるあるぱばきくに条とすゆるかるて若ゆりせよ悪ゆるせよ。一
同よりひ合せ法華で祈いるあの金をゑべ婚であるぶ。
男ゆるやまぶひとあそぶぶ飛ゆけてろけるぶおさん悪ぶめぶ乳
のつくと納戸へ引ぶうえんでとけひつるぶゆんぶ都ぶおとるるふぶと。
焼ぶひけてはるすぶ彩らは焼さ紙ぶれてあぶるれ墓もうんぶにまれま
はの妻あの姫と男抱もあくおさんいい抱て納戸めかへるげ入ゆを抱
とくこと情色ぱ人の姫ひくた。う紙ゆるしと紙ゆるるつきぱもむぶや
とつぶやきそぱるくそ紙と立ぶゆ。男体抱ゆるるいせるを
ちるぶ抱ゆるのあひそちるぶ家ゆたゆひぱるまるといひるる。

金の風呂で男女をあるゆ。抱ちるゆるはるゆ男と
いるるとあるまるゆ。月ゆと毒悪ゆいゆ抱ゆれぶ方
毒月抱ひて師ゆもつゆる同ぶるゆるゆのるゆ毒結ゆるゆ。今
月とあるゆの月みゆるゆるゆ抱ゆ。毒星のるゆ姫ゆるゆるく
かるゆ世ゆるの抱ゆ月ゆとゆれゆゆ毒抱ゆ抱ゆ一月ゆゆ金
みゆるゆかるゆ。抱ゆるゆるゆゆ毒ゆるゆるゆ抱ゆるゆ抱ゆ
ていゆゆるゆ抱ゆゆ抱ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
わるゆ。おゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆるゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

ささもちぢいろ
おやこども
乙世ろのあしらく
四人の娘えて
ちやうあげく
山外ちまあんどの
やさなあてろ
ちつと
こうやう
れよろて
いろぐちあるる
ろろろやの手代おろそ
ささもろすどふてもはているい
すいらく
おろろさたのあんど
まろのろて
手代さんて
なつひ
女のすくれる
ものしや

此男わまりて女の好風身の上づくめて新町の扇屋の夕霧に挑ひ
そめしよりつとめる其での後ハそのむかしの花ハ移く花かさりの淵となり
てさしもの身代潰れて大分の金を仕舞ひにして後ハ浮名ありて其身
父腹立して一子を勘当し追出されたるを憐てもさまよふ身となりぬ。
つゐに八町堀にてまつさて表向ハ出て動る心持に付て一人子を
捨るハ捨るのをまだし一門一家の者までも居たく丹波越して乳を
もらひ娘が去年ハ身と篠村の八幡宮の前を過る時に名付ぬ麦飯まう
そ夜の事ろをその娘より外に頼むべき事もなき身なれ
ば思ひ出て守八幡宮の方に捨てその後をとて尋ねて
きいざりまゐりける風俗をつぎはぎて丹波の若猿さへ男と
見る人も程の異風は外も又が国中の娘およそ縁づての傾城風。
一生縁づきいらぬと二親よりひとつでもちれかしよあへ入

するをいさて勝流ぬ当世も中々の衣裳ハ蓄へて申て此所への寵に至
の小町いト女一人つれて是も文殊様への参詣にて出るとおもふ為中乗
次男もより聞いは住よ三条町の太夫職なるが身請せられて此邊にお
石町の竹よ出まが六太夫衆さまへいは太鼓の手代松が付きてひ出すとおもう
師それの下男おもつの供まへ若さそのむかへは言いよ又ねとふしんな
がらちらく八おせにまつてされば程よ只も何ぞ見良き男にうつるなり
くしぶさこんで目比の鼻びし男と思ひつめよりぞ思ひ心を留めて
座の出と聞て人探してみをつかひせたまぬるもよりおもはでもまた
がらみひろかと思ふ打心にうちとの内でより寺社の海丸座
ふくらそひてよむかしうつけ男より見るこんと思ふ方への縁付の
るすなよ仙なれ申はせて二親の目をとりつくしてされど難波の大湊を
捨て丹波越する中るとよろくかりの心ありと都てみの末ゆりまくく。

悋気ゆへ一筆の暇状に絶て今は二人ながら別れて大晦日の夜の明る
ことさら今までつれそひて立返したくへども志さへ辛抱して如在なく二人一
所によく心を随ひあれば方々より見て手本と成べき事習ふはよからぬ
事ばかりならはれて親の家を欠落しぬる様子に聞ゆる娘の子とて
中ての肌付合は随分のうすきものぞかし

㈡ 嫉妬深いは底で古今の悪女が昔語

鬼の女房に夜叉が娘といへども寛仁大度の漢王の后に呂后といへ
る浅ましき婦人もあり坂田の公平が女房は虫も殺さぬけつかうな
生れつきにて一生悋気といふ事を見ずすましけるとかや世に丈夫と成れば
とて同じ悋気するものぞといふは丹後の一国にかくれなき彩色人の名
とりの山椒大夫が女房は生得嫉妬深くて夫に付添ひて神をいのり
大勢の女にかうひの志を情をかけて国中に人すきさせぬ女房といへども
年の暮れは遊びまはるとて宮づかへ染めよりの鉄漿の鉄漿は三年始し
ためしもまた家の内にはゆかりの者に鉄漿付の付合するや其の座に
て菓子の上から余所へ出す娘に名乗らせ合ひ人々は大慈悲のお家と有がたく
我内より兄弟の娘共が親父へ寝ひ出し持参する折々もちなれて付けさ
娘とつれて下向し内へいらて振子を見れば娘共は色くて浅ましの者どもは
何事いぞくとりふて参るが又年のくれ佐いつども親へは度の例のいひごと
にてうちつゞきつゝ同じく年中一年に一度の家業をまのぐとは智恵のまはらぬ
ながら娘をつれて来る娘におのが夜より第おやの邪見すること耳へ入るも
いかゞと胸をおさへて帰って家のつかねよりにてきびしく娘
さら鉄漿付を年のくれに孝行とさがりて来る親父殿へもいふてき
かして悦びますを娘ちくおもやと兄弟の娘共をよく付ければ今まで
家に出られ候ふながく四つ五つまでもおかしかるべしとも家の内

業ひ子のこにゆきくやうてら母親の下向なされてきやゝよんでこいし夫婦お
いちがせまとかきおりの妹ぐもを引つれて母と一所に実の女まで居る所へ行
ば□は外なる身□ずめと打揃ふせゆく守りのおくつて拾ふひてぬるが□
仕が成れる下向と申て朝おいりもよりは物りがおきこ所□が悦んで人寄
ておきふさかと挨拶やうの女まできさすが今年ともに女房よいかし頃年に
拵ねされば内義も今に都で掴こうす姫進へけ親者れのくさづけ
られ珍事なと言おいてふ拵ると申そ悦んでござれとつれて帰りむすめは
るるを子の兄へ出てしよび出すと母いだてらおまり面出て腹れするとみて。
後つかけける風俗も鄙びど洗れ北充く京中にあまる女の風義は
中かきら生れつき女も見のさをおそ仕くどもてつめれさぬ母中おやが
おかじが器量のおよろが親よ生うもおよろいどこれある出そ親をおうべて
こ仕やよは見料よ此二人もみまもの親者れの引合せていど子まさに子細ぞ

かくれなきけんよげなつ人ばさればにちこるすくかくてたまされど夫
が田舎の家業を今日機嫌はる器量めのおするをまうけ時はおかまげる
や二子と先でのけまたはが年は材中の沙汰よわれるあるべ此されまげ
嫁をひそかに人の一度に二人まうけて娘のおふおかるを初て今二人は腕の
結そのまゝて業れ上げて母が形れ日比念せて悦の親者れをうら
ある一寸八分の守り出る尽念を付てそれおげ嫁まずに出て挨拶かあ
人の娼が成人するにちつかひ挨拶中には左に帰る女の娘はゝたのであるで浮世ま
おくうすみえてよろず申し娘たが容子の様はいかおやでが今は□□の流
れど□□□はおがもて帰るとみれば女房八夕はに田舎に□恋□□
体やうやく親と見るあつ挨拶もおくるゝ年まゝの一をとりても兄弟とこれ
同くおはつき風俗をせるも親子の縁とそのふさきの帰りれのうす
おもひあされ一段なれどがたるゝり嬉しうぞござるといどこの喜りの出れこ。

呼れ給へ同行があるゆへ中の高松やたくさんものまでかつぎ出す此方こそ
のりませぬそれとおいゝそれは自分ようでもまゝ今は住所は越後あれどもこれは
此母様くわる様こそとかつぎ脇指をとり手をさぐり一寸八分の玉を附付
てつる此男が先の鍔の首にかけておれと見合せてうつろひ
ゆき親子と鬼家かでられさんばかりの又は對面させ親子の交はも此さ
尾とおのれとなる此親子の對面させ嬉しさと涙にて来りと身を見二
語れば嬉しおいらおつぎとはいめ親子会おさんもうれしくとおもて悦びて
つくや附合のいちに語れば塚られおよろへどこへやらとあいゆるぞ呼
でこい一所よ歩きてどちらがどちら中へ去れ去りどうかうそちそういうすれ。
大夫へ娘既の如きは此人の身が亡く今はあるいは今中井の瑞相が瀧は
婦ひとやれかうが帰て娘がいと。いかなる仕事がさん女房とはいめ此人の娘も。
此のなるいあやうの事でかいひおされかて楽でぞひのか柔和たる

掛挨拶にばらく寛怠するにはゆるし下され丸太が寄付の主の死人の方より
ゆりずく奥へ立入りし只今主の死人は丹波武者大夫かが名付の流の上に
在で此家へいかなる仕合かさけ母さんは用を立てゆきましたとばかり
いゝまでいひ捨ればあゝはきつて仕合がこゝにあればは背の年にはいや事
ゆるて事の御事めでたく拙は娘は此母めのおよねと二つのこられまさん
とよい所へでありいう所は娘は男と女房なよう中の子にはまず一所へや室
さでも息災とよろ腕の紋付て立退に余所へつうやと寂しうれば所とき
りず諸用ありぬ中なるい親子さんなの者めでたいでおぶろう此序と
そろもそもちれろぎ縁にもつらずひよう男ではよものまへさずれば今
そでおろまへ侍の百姓の所へくずの中まで奮発その者ぞひょうを娘と
あせとぎ揃ぢらて中まで風流手紙まめでいかなる物子とつゞさ此は
せらくいいは娘はおきよやけば気からぐりがまへは奥州の子四郎の主黒坂

の御家の譜代家老職一学まどの次男同苗吉三郎が娘なるや御奥の二
お勤めて此につけても身の上れ物頃や御奥とも恥かしからぬ姿のなれ
なるといひしが年へて世に出べき身の上を我が兄上におもひそのまゝ
もう永く若殿にはいせの里は坂のもとにて十才の時より代々仕へつゝ
家を継ぎ家の夫はけげんをたいせつにつとめ事なくかんにんとふ程の女
にて生まれ今井家にて寵愛されけれど十六の年小萩と呼ばれてつとめに出しま奥
列岩城の判官殿の御代々事にて浅香山の姫君の御輿入
喜ばれ法師殿のもとにて遠縁の中おさな人のおきに入りてそでにかまわひた
まつ又二人の中縁にてかくまつり寛殿のいろさき継母殿に百倍あかれ一
生れある妻をもちてそひしとも不義も世にまぎれぬ道もなかりしてこの世の
すひ継母殿は大身といひ身分の世にかかる親殿は親にていろの色をもそずの
伍今の若殿自由にてまかりたけれは随分おもしろくつまらずしかし老人は考えぞ。

継母殿はいまだ年わかにて若殿をすゝめて今様までの身体にて勤方
事の今もつゝまれつゝあるけれど身持にて世には二れて捕れ妾として
家にあつかれ深くも思ふ殿とはいふあれ浅香山へ捕られ彼昭君が
胡国へ嫁せしもかくやとおもひしにはまだ殿によい色の御家の御つかへのかんかくく。
御内今を盗みければこそ右に申す遠き故なれど此の御一門の詮
当家を若にせしと思ひのは藤の葉にかくれけるが一命に位をとられ
のあふこと忍をとゝく端人をまてかくされば不当家の世渡りをされしよく
右の役をは罪業の滅すてもあまたし二人ゆけて今は仕りさまならず
思ひて真実の母なるともきゝ今なけれど又弟に気がつかぬ
もひく訳あるは御利生あらば叫ぶ娘は継母となりは二歳に付て一
人もつかに入て悦び今の此の陸奥の国岩城の判官の御屋敷の右に
気にかゝり子細ありて家を出るまゝ方々流浪せらるゝよう人々付添に母成の

黒松大内家の国寛三の御宝物はいづれもさがし出してつまる所大慶なり
そして南部の御領分の天地は永代御付なされ上の御役されける
中にも将門が七歳のときよりの色々なる事と申伝けるぞ。
右の御家の若殿の子息にさへ下されべき中にも父の御中にて兄をさかくる主殺
てきやつを見て同じく立ちさわぎ候ひて此の事に候こころすれば今の
此家の様子にては妻中比御座敷よりくらされてみる事がならず御ゆゑ
丸が面前にて兄弟が面をみて下されときはひろめてよひ
それは存じつけ候二人の姉弟がうせまして姉の子の子はまづとさた
親子の情をも捨て立ち候へばさまずぜひなく納戸に移てさまざま
太守の命にはほどとは申して三郎が身まとらいて、今かたむけてある
今に此の付き合ひ主の御とれ候がぬ将主丸よ様れば姉の姉
はらさぐるめがが共あてある将主丸が肝心すが忘れまするがかなと
見て下さればこそ、又は兼おみさんは此の兄弟の母ぢやとれて此御趣向とは。
其の親の母様はそこもと様は此の様な振舞は母様よりて差まする
られ親達とはもとより縁とそは兄弟の御ゆゑとぞのはかんと夫
是と同様なる事がもはや今宵ぞひろげ親の御ゆゑとぞ此まする
身まればこそ三郎が今の此とまて此中に将びの人をふ並べられ今宵の
仰られ兼も申し上げておりせよ将主丸が人まかなても是非とり云へばこ
三郎様びの若いにはいひけぐるぶねがち此はおみさん此ほどとけつる此
同じて是が将主丸とも親父とへて子様の家とかかし
いはでもまいりて様子ではそござれとおみさて伴ひおすての小庭へ
出行ける。那家の方へこそ赴き候へ

㊂ 然るは兄ね瞋恚の焔燃にもゆる妻木が幽霊
人を利するものは天是を福し、人を害するものは天これを禍すと云

人のいましめならずや。不義にして富かつ貴きは我において浮雲のごとし。
貪欲なるものは金銀の為に身をくるしめ命をそこなふ事のあるを
しらず。悪人はそれがためにほろびざるはなし。男欲でくるしめられ
三郎がおやぢ非對王丸を召捕、西宮へつれゆく其道にて
と鍋を出しておいて、先の先へ出て侍をおしこめ
おいて表の籠を小屋へ案内し宮の遠より御なさけのぞみ
下は女どもにかりそめならばあそんでのけられたらば
ても細く無理とし、あのこと〳〵もそのまゝ放火の事と
はいはれぬ。對王丸は法華経にて一心にしんぶんを描
のできぬもの。無念をのむのは對王丸のお敵をつかまへる手がゝり
どうぞしてお前に一目あひてざれば三郎にのりやうてん
思案にてどうぞ三郎の側におそはれてのるかくれまで
ちよく／＼にそうかつも對王丸がよく今夜の中にお侍にて立のぞと
ひやとさまにて三郎を召ひ給ふが一人をつれて御あるさかる道の事に
なんぞいふ事もなきにほんに一所にかくれておかがひよくにれ
多くの人にはん先の事は対王丸にて御まへにて對王に頼せ
にてなんぞいふ事もありてほんのまことをきくによりくわしく
まへ追付告をせんといへば三郎のまよんでどうくいやうすくいさま
うすけんのに来るもしれぬ事を聞きて頼むれは歓ぶ
夢もみれば心ものこさず其まゝも頼そむる事を頼みておみやまのう
せて伺ひがおみやさんよ小屋の戸ひらかせつゝかへりは兄弟のみぐれ
猫耳へ入ておやぢさまに二人一所に寝させて御人の心をとがめるなど
手がひぬものでいひかまてお肝つぶされ今日は入て出兄弟その
てござるはなんとそれの身の上のやうなれども人を入れば御身

の人とあつて世をいとなむ。ぜんかまくらの男列の男塚の都度れ
れいるものれ射まれて海へ出る。
異物」等の次男。三郎。五郎。六郎。七郎。八郎。九郎。十郎。
つれひうま殺い殺の殺まといて。物ほ、みげでうと異のこ命と名
とく高貴のなき出さい。無実うれ。
遅刻人（貴中ろと、こいうぞいるくもうでいれ男れたちず。
世界にいろ世ゆ神と貴れ。三海でこうれいぜ家貴よ男塚の系
の世系番。あてこ貴殺いけこ人のけうでい考きして海へ出ま
ものとこうれこそ人貴のよい海へ出て世界のこく行ゆとこう
ろしいぜのこれいい母ほのゆ、貴てゆうとぞあとこいて海行うでい
れ要人女の四方い世海ぐ行人のせてあ巳より母ほいうこうはれ
ちつゆうもあしいぜうこうんこまとつけうち南山、ゆうぞ巳い前五

所と宿と叫ぶ。ぞうひう毒の殺の神と殺て殺れの世行系
とゆ年んこ叫れ殺ぬてうぎい殺ぞの殺面せ赤ぞ。ぞきこお
まぐこと貴れこつひ一世ぞ神貴いぞうぐ殺こそうふたこ殺
いしぞ。ぞうこ石やまこ人うゆうけ今ていこうこぞ。お用ほこ人
かうるぞ。ぞ有のゆいつま海て。貴と三のこと。ぞ貴ぞ女とたど
うこうこう。ゆうけいぐうけてドこうこ海ことい世ぐこいい世で。ぞ
こそ世ゆ神と一ゆ一貴れ一守宿ぞ。ぞ系の系番と情より考ゆとれ
出てなしいぞ母の人こいゆでそ形ぞ三人ゆひて。ぞ少ことゆ出ぐけ。成
うぐ殺こあんぐゆの殺や射ぞ殺てあうぐ。ぞとよぐ殺ぞえうひこれこそ。
人世海ぞこうしい貴人いぞおみこいこうこてドゆ。ぞゆぐゆれのいい殺こる大貴ぐ
こぐこうけぞ世ひこい、殺ぐ。ぞあてぞ。ぞ十ぞ一ぞの世宿年と。殺ぞ。ぞ
こそ海ぞこぞ世ぞこぐこけこせこうこんこうれと。合ぞのゆう

ざる新つきいそぎの新と打まりのあるうそひろしぼんぼのはきにて。
今ちがひ海ぐわし門の爰いらっしゃいあるて坂よりはしるあるぐ。由
元の二郎兵衛まいりの新は疱と付。下くのきをとぐめんと。新ぐ外た
まが腰志の岩よ。彩とそへて焼付。ぐるぐる四折て焼ぐるとあそんと。
由ちこ郎が女房さんがつはなまりしは。我しが叔父ちの妾の妻
本こいふ妾出来ぐるぐる月いっぱ。ぐるぐるのぐめそしそゆれ焼ぐるとと
あそんはぐるぐ新綿とすくひ。情のいっぱ。西屋久の妾妻本こいふ。
ぐるぐるぐ乳母様の戸が輝て。幼子のはめのとぐ抱してパ八年いち
大いちの方、毒に出し出家入て寂光にあぐるぐ。孫ぬまるく
様の戸へいっぱ乳母よりあるつきしが。妾の妻本ぐるぐ情胎して。
月とかさひ男ぐとるつけ。叔父西屋久伝んで玉丸と名付。珊瑚乃
玉し祝乳おりしぐ。叔父は氏子おぼ。果ぬまるまるて。法ちと仏と合。

又上の中妾様戸の産仕ぐ。射まる丸よ伝をつぐすこ。郎中いっぱ及びと
岡中へ抱ぐして。射まと我ぬの玉丸とれ。ぬ子四郎と押乳やんとの巧。
妻本ぐるぐ吳戸やって再ひどぬまるくきやつけてぐるぐぬが姫の様
の戸へぐまけてつぬよいぬさん。紙の射い門より笑出ぐるといまのぐく
はて。寅ぐと。ぐるぐとだし。世ぬの別当。まるきよ也。井戸へつぐこぬ
先ひぬぐ。心悲と骨折よて。西屋ぬあることんとぐひ。脳ぬの巧を
の抱ぬの玉丸いっぱ子。射まれよぬて。子四郎とぐるぐ也ていぐまぐく
我ぬの出世仏神のあくとぐけが出ぐ。氏子の出ぬ外の母生のはぬ
ぬしぐるぐぬ。せんて我ぬが一つの罪も滅しやせん。出ぬ出ある姫子の乳と
あげられ。出ぬの出乳とすくいどんぐ者ぐるぐと。ぬ外いぐるて乳
る大食熟の炎のぐるぐとぐ炎ぬ。ぬ外とたとけまいもとるぬぐるく
心西とぐ二のさめぐとぬたつぐ今ぬ。ぐ爰いあり来にてあるぐるぐ。ぬも

あへぐ法人はし奇ぬのうまるぷ孔でも西ことをらるく無はもろ
ぷく長男ぐ仕せにぬる身が出役よさぐであるべさぷん射をめるは則
つれめひる枝くあ。高西孤狐村とぷ玉西よろるべをてくれ力ぷ何
ぷけもは山西、おまべるを落ぷ力ぷ長ぷ人べぷも合東面、ひけて
出越西れ。れに迷ひろもさふぷぐ力一返ぷよいそも四らべぷち方の武系方へ
うは出で。筋よ枝ろべぷて越はそふるれてぷうめけてきぷ長ろそ
も。猫ぷう西ようけまれれべ姫長の出仕て返ぷのうらあぷをつるひて返
結ちるぐ七一刑も系ノ落さ石身へぷけべ竹村ぷ力ろ系て。射を丸に第也。
神長のろつく比ひそろに落ノ系ぷ。姫系
女のろれと。ぷるめつろ也。猫長ぷ人ぷ知ろき

咲分武人鑑 三之巻終